



家庭訪問型子育て支援の充実と発展について

～ホームスタートというボランティアの実践を通して考える～

社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻

市村 彰英 教授

【研究分野】 家族臨床心理学、非行臨床心理学、コミュニケーション、悪循環と好循環の分析
 【キーワード】 子育て支援、家庭訪問、傾聴と協働、児童虐待、グループワーク
 【URL】 <https://www.spu.ac.jp/academics/db/tabid334.html?pdid=192ichi>



研究概要

<研究概要> 1

子育て支援には子育てサロン、子育て広場など、子育てをする母親たちが集まる拠点が設けられています。孤立感の強い母親たち（以下「利用者」と記す）は、その場所にまで足を運ぶことができないのです。そこで必要とされるのが家庭訪問型子育て支援（ホームスタート：以下「HS」と記す）というボランティア団体のサービスです。ネットやピラなどでこの存在を知った母親たちは、ネットや電話などで連絡をします。とりまとめ役であるオーガナイザー（以下「OG」と記す）が連絡のあった利用者宅に足を運び、事情を伺い、訪問担当するホームビジター（以下「HV」と記す）を選びます。初回はペアで家庭訪問し、その後HVが1～2週間ごとに4回訪問します。HVはその間に利用者たちに傾聴と協働を繰り返し、利用者たちの子育てをサポートします。その結果として子育て支援の拠点につながったり、必要な行政サービスなどを受けられるようになっていく場合もあります。このHSシステムの有効性を質的機能的に分析し、保健医療福祉分野である病院や保健センター、市役所子育て支援課、保育所、児童相談所などの行政システムとの子育て支援の協働の在り方を考えています。

<研究概要> 2

子育て支援という母親支援をイメージしますが、児童虐待の半数は実母ですが、3分の1は実父なのです。私は17年に亘ってわが子を虐待をしてしまった父親たちのグループワークを行ってきました。グループワークを繰り返す中で虐待の起こる父子、夫婦、家族の関係が相互的に変化していきます。マザー＆チャイルドグループ（通称「MCG」）は保健センターなどでよく施行されていますが、父親グループは東京と大阪で行われている以外に続いているところが少ないのです。このような取り組みができるようなシステムを構築し、子育て支援、児童虐待防止につながっていく試みを目指したいと考えています。

講座テーマ紹介

- <1> 家庭訪問型子育て支援のボランティアと保健医療福祉分野の行政との協働について
- <2> わが子を虐待をしてしまった父親たちのグループワークと家族再統合について
- <3> 虐待を受けた子どもたちが辿る非行という行動化のメカニズムについて

アピールポイントなど

私はこの大学に来て現在で19年目になります。それまでは20年間家庭裁判所調査官という専門職国家公務員として家庭裁判所でカウンセリング、ソーシャルワークをしてきました。家族やシステムの中で生じる悪循環を好循環にしていける解決に必要な円環的因果論（家族成員の相互関係）について、臨床的に研究し、実践しております。